

若き黨員作家蔣光慈と『麗莎的哀怨』

——三十年代の入口で

青 谷 政 明

新中国の成立により、芸術の組織化及び芸術家の集団への帰属という問題が以前にも増して重い事実として芸術家の前に存在することになった。

もちろん母国を離れての創作活動は不可能ではないし、事実、絵画や彫刻など空間芸術においては、成功例は少なくない。とはいえ、言語を操る芸術家である作家や詩人は、母国語の大海についてこそ、その創作活動と作品もより精彩を放つことは言うまでもない。

中国文学は他のいかなる地域のそれにも増して史的に政治と密接不可分に近い関係を有してきた。解放後は、それに「全国統一運動＝単一団体＝単一理論＝単一スローガン」という概念が自明とされるようになり、これからはみだしたり、対立することがひどく奇怪な印象をあたえるようになった」（竹内実『現代中国の文学——展開と理論』、研究社）点が特徴として加わった。

この「単一化」に対して、55年の胡風や57年の丁玲らのように異議を唱えた人々は長い間、創作活動が不可能な状態に置かれた。彼らは反革命、反党あるいは右派分子として断罪され、文芸界から姿を消しただけでなく、社会的存在としても極めて窮屈な立場に身を置くことになった。「四人組」以後、出版の洪水の中で注目されるのは、胡風のように「意見書」提出や丁玲のように作家協会脱会というような劇的な行動ではなく、創作によって、その枠を打ち破ろうとする（かのように筆者には思われる）人々の営為である。

「復活」後、散文芸術の可能性を徹底追求するかのように様々のスタイルの小説を発表している王蒙、詩的直感の冴えを感じさせ、中国革命と党の指導という社会主義国家の根本問題に抵触する

「苦恋」の白樺、社会主義社会にも解決困難な矛盾が存在することを、当然ではあるが、いち早く提起した「班主任」の劉心武、それに老地主に嫁いだが故に、青春を棒にふり、「解放」後も仲々「解放」されない貧農の女性を描いた「啊，人……」の雨煤、彼らは筆者の狭い「当代文学」の読書範囲の中では、特に今後の仕事とその動向が注目される作家である。（「四人組」以降の文芸界の状況については『月報』362, 374, 376, 378, 397号を参照されたい。）

散文、とりわけ小説が主流となった現代中国の文学界の源流を溯れば、魯迅に行きつくことに異論はないであろう。その大きさに比すべくもないが、一支流の水源には蔣光慈が位置する。彼は革命後のロシア文学の息吹を中国に伝えた最初の一人であり、「革命文学」を最も早く唱えた一人であった。また瞿秋白とともに、最も古い黨員歴をもつ文学者であった。そして、彼は所属する集団により、作品と創作活動を批判された最初の作家であった。つまり蔣光慈は、創作活動において、一線を越えたが故に批判された、最初の「黨員作家」であった。一線のひかれ方は時代とともに推移する。彼が文学者として生きたのは、「四・一二」クーデターをはさみ、中国共産党が中国革命の方途を暗中模索し続けていた時代である。

蔣光慈が、モスクワ帰りのマルクス主義文学者として「五四」の高揚が去り、混迷する文学界に登場したこと、それは「五四」を闘った青年のその後の軌跡として、まさに一典型をなす。したがってこの小論は、プロローグとしては、いささか長くなるが、「五四」を闘った青年の革命ロシアへの軌跡を辿ることから始まる。

序章 — 革命ロシアへの道

1917月、蔣光慈は安徽省立蕪湖第五中学に入学した。⁽¹⁾ 国文教師には、中国共産党初期の有力な指導者の一人で、後に処女詩集『新夢』の出版を薦める高語罕がいた。⁽²⁾ 当時、数ある蕪湖市の学校の中でも五中は、校長の劉希平自らが「五四」時には高語罕らとともに学生たちの運動を支持し、時にはその運動の先頭に立つといった、仲々進歩的な学校であった。⁽³⁾

1919年、「五四」事件の報が伝わると、蕪湖の学生は市内の商業学校に集まり、蕪湖市学生連合会を結成した。蔣光慈は「一に能弁、二に筆がたつ、三に勇敢」という条件に基づき、副会長に選出された。⁽⁴⁾ 同じく安慶では、安徽全省学生連合会準備会が結成され、各地で抗議行動が展開された。「安徽の学生がデモンストレーションで結束してから六日後（5月15日）に、臨時工作機関を組織し」「5月25日になり、各校の学生代表を招集し」「安徽全省学生連合会が成立した」。⁽⁵⁾ 蔣光慈らの蕪湖市学連は、安慶の学生組織とともに安徽全学連の有力な支柱となり、日本商品ボイコットを中心に運動を進めていた。安徽省各地の商会が学生らの運動に同調する傾向にあった中で、蕪湖商会会長の湯善福らは頑固に反対し、学生の攻撃的になっていた。学生は大動員をかけ、同商会を包囲し、実力で屈服させた。蔣光慈は五中時代に「抗日救国十人団」を組織したり、ガリ版刷りのパンフレット『自由魂』を編集したり、「鶏毛報」なる宣伝物を発案したり、仲々機知に富んだ熱心な活動家であった。「鶏毛報」とは、黄色の紙に鶏毛を貼布し、商人の罷業を呼びかけたもので、深夜より未明にかけて商店の隙間から投げ入れられ、彼は徹夜の活動がたり、過労のため痩せて、吐血したという。⁽⁶⁾

隣省河南では1919月末、「個性の本能を発展さ

せ、真実の学問を研究し、青年の真の精神を養成する」目的で、開封第二中学に青年学会が結成された。後に他校、他省の学生も加わった。「彼らは河南省立第一女子師範の進歩学生が組織した『女子同志会』と相互に支援しあい、緊密に協力した外、当時、安徽の学生運動の牛耳を執っていた蕪湖第五中学の進歩学生と常に通信し、北京で高等師範附属中学の進歩学生が組織した『少年学会』と兄弟学会を結成して相互に出版物を交換した」という。⁽⁷⁾

「安徽の学生運動の牛耳を執っていた蕪湖第五中学の進歩学生」の一人は、蔣光慈であり、「省立第一女子師範の進歩学生」の一人は、宋若瑜であった。二人はこの活動を通じて知りあい、文通を交し、長い交際の末、1926年に結婚するが、若瑜は数箇月後に病死してしまう。⁽⁸⁾（尚、当時の「少年学会」の責任者の一人は1927年の上海の労働者蜂起の指導者の一人趙世炎で、瞿秋白とともに中編小説『短袴党』の主要人物のモデルとなる）。

青年学会の中心的存在であった曹靖華は「五四運動以前、彼らはみな文語文を書いていたばかりか、古文を模倣し、文章を書くにも古雅であればある程、難渋であればある程、分りにくければにくい程よいと考えていた。内容も当然ながら封建的であった。これは国文教師が提唱した結果であった。五四運動が爆発して、彼らは新思潮の影響を受け、率先して白話で文章を書いた。宣言、伝単、通告、標語などは全て白話で書いたばかりか、教室での作文も白話で書くように改め、同時に新式の標点符号も用いた。これは当時にあっては破天荒のことであった。」という。⁽⁹⁾ 開封二中では、国文教師の怒りをかい、学園紛争へと発展するが、蕪湖五中は校長が進歩的な人物であったためか、国語教師に高語罕がいたためか、以前は似たような状況であったと思われるが、多少抵抗はあったとしても、開封二中ほどではなかった。⁽¹⁰⁾ 蔣光慈は郝大顛らにより創刊された『皖江日報』副刊『皖江新潮』に白話

文と新詩を投稿し、反帝反封建を訴えていたといい、また錢杏邨、姚逢子もこの副刊に作品を発表していた、という。⁽¹¹⁾

当時の青年の多くがそうであったように、蔣光慈も個性の解放と自由平等を強く主張するアナーキズムに惹かれ、「安社」なる結社を作り、宣伝につとめていた。⁽¹²⁾『自由魂』はその名からして、アナーキズム関係の宣伝物であったとも考えられるが、「安社」の実態とともに詳細は不明である。ただ、「安社」は少なくとも1922、3年頃まで数度の改組を経、蕪湖の地に確かに存在している。⁽¹³⁾ 蔣光慈は終生、「個性の解放」、「自由」を強く希求し、組織生活には積極的ではなかったが、それはアナーキズムへの共感と無関係ではなかったであろう。曹靖華はまた、「彼らは離経叛道の大旗を掲げ、家父長制に反対し、綱常名教に反対し、奴隷教育に反対し、社会上の一切の不自由、不平等な現象に反対した。彼らは個性の解放を要求し、男女平等、婚姻の自由を主張し、死書を読むことに反対し、工読互助、労働の神聖を主張し、社会上の一切の不勞所得せる寄生虫の生活を徹底して憎んだ。」といい、「彼らは共産主義とアナーキズムの本質的矛盾さえ明確には分っていなかった」という。青年学会は1920年1月1日付で『青年』（半月刊）を創刊するが、経費困難のため、同年5月に7号を出して停刊する。寿命は短期であったが、毎号4、5千部が印刷され、広く読まれ、河南では相当大的な影響力をもったという。⁽¹⁴⁾

「五四」を闘った青年や学生の中から、単に売国的官僚の退陣や日本商品のボイコットだけでは、祖国の危機を救うことができず、旧社会のあらゆる不合理な制度を根底より消滅させることができないと考える者たちが出現する。彼らの中には、時間的順序を無視するかのように短期間に一斉にもたらされた、西洋の近代思想が混沌とする思想界の状況下で、「共産主義とアナーキズムの本質的な矛盾さえ明確」ではないまま、ロシア革命へ

の共感とともに、一つの思想に急速に惹かれていく者たちもいた。民主主義とアナーキズムとそれとが混然とし、未分化のままではあるが、『青年』にもそのことを示す意見が登場している。

「私が土匪であるなら、私は『デモクラシー』の大旗をうちたて、緑林健児を糾合し、Bolshivismの教科書を編み、Bolshivismの教育を実行する。」

「不平等な階級を打破せよ、公産社会の先鋒隊を作れ、二十世紀の世界史上に公産を実行する新紀元を開け。」（潘保安「胡思乱想」20年3月第4期）⁽¹⁵⁾

「五四」を闘った直後の蔣光慈も同様の思想傾向にあったと思われる。高語罕は、処女詩集『新夢』に寄せた序文で、「その頃、彼はアナーキストであった。後に彼はソビエト・ロシア共和国に留学し、赤光の洗礼を浴び、紅旗の下、熱烈なマルクス主義信徒に変わった」という。蕪湖における学生運動と青年学会等の活動を通して革命のロシアへのレールが敷かれる。

「五四」後、北京大学図書館管理員の蔡曉舟が安慶に来て書店を開いていた。蔣光慈は彼から『湘江評論』、『錢江評論』，などを送ってもらい、受け取った彼は進歩的な学生に送っていた。蔣光慈はこの仕事を非常に熱心にやり、蔡曉舟の紹介で彼と同窓生の呉葆萼の二人は、上海外国語学校へ行って、コミンテルン代表マーリンの秘書をしていた楊明齋の下で、ロシア語を学んだ。その間に二人は蔡曉舟の紹介で社会主義青年団に加入し、上海を出発し、ウラジオストックよりシベリア経由でモスクワを目指す。⁽¹⁶⁾

困難な道程はすでに踏破し、
危険な関門はすでに過ぎた。
大いなる白色テロルの恐怖が、
今は紅い笑いに変わりさえした。

日本海の荒波はどこに？

ウラジオストク
海 参 崴 の砲声はどこに？
ウラル
私は烏拉山の頂きに登り ——
つきぬかなたを眺望する。

バイカルの碧したたる清水が、
私の心を洗い清める。
バイカルの山洞を、
ひとつひとつくぐり抜けると ——
尋ねるものみな輝きなのだ。

あれが太平洋か？
あんなにも烏煙瘴気！
あれはモスクワではないか？
どれほど夢見た恋人か！
私はもうじきおまえと抱擁をかわすのだ！
(「紅笑」1921, 7, 4, 於烏拉嶺)⁽¹⁷⁾

同行者には、曹靖華や安慶で熱心に学生運動をしていた韋素園、それに劉少奇もいたという。⁽¹⁸⁾ 中には帰国後もアナキストとして活動する者もいたが、⁽¹⁹⁾ いずれにしても彼らは「五四」新思潮をもたらした人々ではなく、それによって人間形成をし成長しつつあった若者たちであった。彼らは「中国社会主義青年団員の身分でソ連へ赴き」、それは中国が「ソ連に派遣した第一回目の代表団であった」⁽²⁰⁾ という。蔣光慈はモスクワ東方大学（クトヴェ）で政治経済学を学びながら詩作を続け、瞿秋白と知り合い入党し、⁽²¹⁾ 3年の留学を終え、1924年夏、帰国する。

I. 国民革命の挫折の中から

1926年から翌年にかけて、上海では数度の労働者の蜂起、ストライキが決行され、北伐軍が上海近郊に迫った27年3月、上海総工会のゼネスト指令には、労働者に呼応して学生、商店員らも加わり、一時的ではあったが都市の権力奪取に成功し、臨

時市政府が成立する。蔣光慈は主として街頭での宣伝工作に従事し、その闘いの様子を小説にした。

『短袴党』と題されたその小説は、作者自身、前書きで「多くの点でいわゆる『小説味』に欠け、粗製の譏りを免れないと思う」が「中国革命史上の一つの証拠」として「それ相応の意義を持つだろう」と書いた。更に生まれあわせた時代に感謝し「私は今、私の時代が私に与えてくれた任務を完成しようとしているのだ」とも書いた。「四・一二」クーデターはそれからわずか9日後であった。

蔣光慈の身边にも危険は及び、長江を溯り武漢へ向い、5月から9月にかけて滞在した。それはちょうど中国共産党五全大会から中央緊急会議（いわゆる「八七会議」）にかけての時期に当たっていた。五全大会では国共合作を継続すべきでないとする意見が多数派を形成したにもかかわらず、陳独秀らの継続の主張が反対派をおさえた。国民党加入による合作はコミンテルンの主張でもあった。形式的には南京の国民政府に対して、武漢では国民党左派と共産党の合作は継続していた。しかし、7月に入って陳独秀指導下の共産党は、やはりコミンテルンの指示を受けて、今度は武漢政府を退出し、数日後には国民党が「容共政府は破壊された」との共産党非難の声明を発し、第一次国共合作はここに完全に崩壊する。同時に共産党及び労働者、農民組織に対する弾圧が開始される。いわゆる「清党」であるが、五全大会の方向は現実として否定される。八七会議では、陳独秀は党中央を追われ、瞿秋白の指導権が確立する。共産党は農民運動、土地革命、労働運動の発展を党独自の方向として打ち出さねばならぬ必然性を生じることになった。しかし、前二者は秋收蜂起にみられるように各地で失敗し、労働者による都市権力奪取のための蜂起も、いたずらにストライキ、暴動を繰り返すばかりであった。国共分裂後の階級分化の促進が即革命情勢の高まりとする状況判

断の誤りは、ソ連共産党内の権力闘争及びコミンテルンの中国革命に対する認識不足にも起因するであろうが、直接的には中国共産党の未熟さにその多くを負っていた。瞿秋白、李立三、王明と続く極左路線を後から「盲動主義」、「冒険主義」と批判することはたやすいが、ある意味では避けて通ることのできぬ、産みの苦しみとでもいうべきものであった。蔣光慈は瞿秋白とはモスクワ以来密接な関係にあった。上海大学では瞿秋白は彼の属する社会学系の主任であり、瞿秋白の編集する『新青年』（季刊のち不定期刊）に「革命文学」を唱える「無産階級革命与文化」を書いたり、レーニン、スターリン及びコミンテルン関係の論文・決議などを訳載したり、二人で郭沫若を訪問したり、彼との親密な関係を示す事項は多い。⁽²²⁾

蔣光慈は以前、汪精衛と蔣介石を中国革命のレーニンとトロツキーに擬していたが、⁽²³⁾上海一武漢と相ついで国民革命を裏切るのを見た。国民革命の打倒対象の一つは封建軍閥であった。しかし、ここに右旋回した国民党は、蔣光慈の眼には、それまでの軍閥がせいぜい「土匪を利用」する程度の「知恵」しかなかったのに対し、「革命」の仮面をかぶり「民衆の勢力を利用することを学び取った」、狡猾でより強力な「新軍閥」として登場した、と映った。⁽²⁴⁾まさに、このような状況下で太陽社の基礎が築かれた。まず、武漢へ向う船上で同行していた孟超の紹介で楊邨人に会い、少し前に苦難の末、別経路で武漢に到着していた錢杏邨と会う。⁽²⁵⁾錢杏邨とは蕪湖で「五四」を闘って以来の友人で、二人はよく行き来した。彼ら四人の間で雑誌発行の話がまとまり、翌28年1月1日発行をめどに準備を進めることが決められた。全国总工会宣伝部で工作していた錢杏邨は8月26日、「緊急の書信」を得て、一足早く「この地を離れないわけにはいかなく」なり、「手紙を書いて邨人、孟超、光慈に別れを告げ」る。蔣光慈はその二日前に錢杏邨を訪ねて、安徽へ帰る陸路の行程表を

書いてもらっているが、武漢出発は錢杏邨が先になり、上海へは蔣の方が先に到着した。⁽²⁶⁾

上海へ戻った蔣光慈は、雑誌発行の準備を進める一方、『創造週報』の復刊計画に加わった。彼は鄭伯奇、段可情と魯迅を訪ね、鄭によれば「首尾は上々であった。彼に常任選稿人になってくれるよう希望すると、彼は無条件に承諾した」という。⁽²⁷⁾しかし、よく知られているように、『創造週報』の使命は終わったとする成仿吾らの反対により、結局復刊計画は流産するとともに、革命文学論争を複雑にする一因ともなるが、これに関してはすぐれた論及もあり、⁽²⁸⁾これ以上述べない。創造社との合作に失敗後、蔣らは増々自らの雑誌と書店を持つ必要に迫られることになった。

楊邨人によれば、太陽社が組織的結束を固めていくのは、「創造社の襲撃」を受けてからであり、「茅盾らは彼らの文学研究会の設立は双書を出版するためだと言ったが、我々の太陽社の設立も雑誌を出版するためであり、これが太陽社の歴史の起源である」と緩い結びつきの同人誌的グループとして出発したように書いている。⁽²⁹⁾しかし、彼らは上海で同じ閘北区第三街道支部に属し、楊樹浦一帯の労働者区に住み、文学活動と同時に労働運動に従事しており、客観的に見れば人的に強く結びついていた。また事実、早くから組織的拡充も計られていた。錢杏邨は後に太陽社員としてプロレタリア文芸理論の翻訳紹介に尽力する林伯修（杜国庠）について回想した文中で、こう述べている。

「1927年冬、『太陽月刊』を世に問おうとしていた頃、蔣光赤と孟超と私、それに他にも同志がいたと記憶しているが、洪靈菲の家で彼に会った。我々は全員、第一次大革命失敗後、別途に武漢と広州から上海へ流浪してきた。その時、彼はちょうど、靈菲、戴平万と『我們社』を組織し、『我們月刊』を編集発行しようとしていた。

これより両社は一体となり、相互に工作に参加した。」⁽³⁰⁾

太陽社は「多くが党员であり、彼らは瞿秋白との関係が相当密接であり、思想上、瞿秋白の『左』傾路線の影響を受けやすかったばかりでなく、組織上もやはり瞿秋白の制約を受けていた」とする説⁽³¹⁾もあり、銭杏邨自身、後に「当時の党中央の幹部が参加し、秋白、楊匏庵、羅綺園、高語罕、鄭超隣がいた。秋白は工作上、多くの指示を出したが、政治工作に忙殺されて何も書かなかった。」⁽³²⁾という。

瞿秋白が太陽社設立の当初より、実際にどれ程具体的にかかわっていたかは不明である。ただ、太陽社の設立意図が、楊邨人の言うように、雑誌発行にあったとしても、蔣光慈は文学者としては最も古い党员歴を持ち、国民革命挫折直後の情勢認識は、その詩「寄友」⁽³³⁾にみるように、瞿秋白路線を生んだものと同根であり、党员である限り、文芸に従事する者であろうと、当然、党の方針とは無関係ではあり得ない立場にあった、ということはいえよう。

『短袴党』以後に書かれた小説⁽³⁴⁾は、私的怨念から絶望的な闘いを挑み、いずれも主人公の死をもって終る。強大な敵に個人で立ちむかうのは英雄的かも知れぬが、冷静な情況認識を欠く盲動であり、主として組織、集団の力を描いた⁽³⁵⁾『短袴党』とは対照的であった。『太陽月刊』⁽³⁶⁾創刊号の巻頭で「兄弟たちよ、太陽に向い、光明に向かって出発しよう。我らは悲観もしないし、恐れもしないし、落伍もしない」と書いたのは、国民革命を闘ってきた党员としての自分に対する叱咤ととるべきであろう。1928年4月、瞿秋白路線は正式に廃止され、瞿秋白は6月、モスクワでの六全大会に出席し、そのまま当地にとどまる。六全大会以降、上海の党中央は次第に宣伝部長李立三が実権を握ることになっていく。『麗莎的哀怨』は、その時期に書かれた。

II. 『麗莎的哀怨』の波紋

太陽社は1929年1月、『海風周報』を創刊した。その第2号では、28年12月30日に中国著作者協会が成立したことを告げるとともに、「蔣光慈君は小説翻訳の仕事の完結後、引き続いて長編小説『麗莎的哀怨』を書き、上海の白色ロシアの舞姫の祖国に対する追憶、及び新しいロシアへ帰りた」と渴望している心理を描き、中口両国を地方的背景としている。」と次回作の予告がなされた。⁽³⁷⁾

蔣光慈は自ら主編する『新流月報』⁽³⁸⁾の創刊号より『麗莎的哀怨』を十章まで三回に分けて連載し、更に三章を加えて8月に単行本として出版した。彼は創刊号の編集後記で同誌創刊の目的と意義について、「眼前の猛烈な勢いの新時代の文芸運動に、推進する力を一つ加えようと思ったからである。我々自身の能力は微弱で、努力の結果も文芸の前途に対して何らの援助にならぬかも知れぬ。だが我々は力を尽して、不断の努力を持続すれば、ついには相当の影響を及ぼさぬはずはないと信ずる。」と書いた。そして最後に自らの『麗莎的哀怨』に触れ、「この一編は私の大胆な常識（原文＝常識チャンシー）であり、ただ一つの試み（原文＝嘗試チャンシー）であるのみである。自分でももとより満足のいく作品とすることはできない。成功であるか失敗であるかは、発表が完了した時点で再び読者に批評を請いたい。」と述べた。しかし、「発表が完了」しないうちから「相当」どころではない「影響」が及ぶことになる。それは作品批判のみにとどまらなかった。

まず、その内容を見ることにする。

1927年の上海、死を決意し、様々な思い出とともに流浪十年の総括がなされる。「私たちが祖国を離れてすでに十年になる。私たちはいつもボルシェヴィキの失敗を期待していたのにボルシェヴ

ィキの政権は日増しに強固になっていった。私たちはいつも再びロシアへ帰ることを望み、あの過ぎ去ったロシアの美しい夢を温めていた。しかし美しい夢は増々私たちから離れ、増々遠ざかっていき、永遠に復現する時はないかも知れない。私たちはボルシェヴィキのロシアが日増しに成長し、野蛮なボルシェヴィキが偉大なロシアを統治するだけでなく、ロシアが歴史的な栄光を創造するのを見たが、それは私たちの必要とする栄光ではない。しかし「現在、私ははっきりと分りました。ロシアは亡んではいません。亡んだのはロシアの愛護者と自称する者たちなのです。もしロシアが滅亡したというのなら、それはただ帝制のロシアが滅亡しただけであり、あの地主の、貴族の、特権階級のロシアが滅亡しただけなのです。新しい、ソビエトの、ボルシェヴィキのロシアは生長しています。私たちの意志に反して生長しています。私たちが愛したのは古いロシア、しかしそれはすでに死んでしまいました。永遠に死んでしまったのです。私たちは本当に愛していたのでしょうか。いいえ、私たちが愛したのは、どんな祖国でもなく、古いロシアの制度下の、あの私たちの幸福と利益、あの白い花、やさしい暖かいお部屋、盛大な宴、貴重な財産……これだったのです。」（一章）。麗莎は将来を囑望された青年将校と結婚し幸福な日々を送る。しかしロシアは二月革命から十月革命（社会革命党、メンシェヴィキからボルシェヴィキへの権力移行として描かれる）へと進み（二章）、イルクーツクへ逃れ、更にウラジオストックへ逃れる（三章）。ウラジオストックを去る前夜、祖国に残るか否かで夫と口論するが、結局上海へ向う（四章）。東洋のパリ・上海はヨーロッパ風の豊かな文明と貧しさの同居する「神奇で不思議な都市」であった（五章）。やがて蓄えも底をつき、夫も無気力になり、ヌードダンサーから売春婦へと身を落し（六～九章）、木こりイヴァンとの思い出（十章）と上海でのロシア革

命十周年の事件（今年は領事館員は追放され、赤旗もない）を挟み（十一章）、同様の境遇のロシア人の哀れな末路（十二章）から現在にもどり、死を前に革命党に走った姉のことが頭をよぎる。姉の生死は不明だが、たとえ死んだとしても祖国のふところに抱れて眠るであろう。麗莎の屍は呉松江の魚の腹を満たすだけ。「さようなら、私のロシア、さようなら、私の荘厳なベテルブルグ、さようなら麗しの故郷——ヴォルガの河よ、さようなら、何もかも永遠にさようなら」（十三章）。

蔣光慈はこの小説が単行本として出版された8月、非難の中で日本へ渡り、11月まで東京で過す。創作、翻訳のかたわら、楼建南（適夷）、馮憲章、盧森堡（任鈞）らと太陽社東京支部を作り、定期会合をもつ。出国時には投獄されていた錢杏邨より、11月4日と6日に便りが届き、帰国の意志を固め、15日に出発を決定する。⁽³⁹⁾

帰国した29年末には、中国左翼作家連盟（以下、左連と略称）の結成準備が進められていた。中国共産党中央宣伝部はこの年の後半、「上海における文化工作の指導機関」として「党の文化工作に対する指導を強化するため、臨時中央文化工作委員会（略称『文委』）を成立させた」という。⁽⁴⁰⁾ 党サイドよりすれば、この文委を中心に創造社、太陽社員及び魯迅を含む文学団体の結成が進められたわけであるが、その経過は夏衍によれば概略は以下の通りであった。⁽⁴¹⁾

党内では文芸界の「内戦」を停止し、左連を樹立する提案がなされ、準備小組が作られた。小組員は、魯迅、鄭伯奇、馮乃超、彭康、陽翰笙（華漢）、錢杏邨、戴平万、洪靈菲、柔石、馮雪峰それに夏衍と蔣光慈の12名⁽⁴²⁾で、魯迅と鄭伯奇を除き、全て黨員であった。10月に党招集による第一回準備会議が開催され、参加者は10人の黨員と中央宣伝部の潘漢年であった。潘は党中央が「内戦」を停止することを主張しており、魯迅を含む

左連を組織することの意義及び「宗派主義」,「閥門主義」に反対であることを伝達した。また党中央の指示として,発起人名簿の作成と綱領の起草を通達した。会議では二つの文件の初稿を用意し,まず魯迅に見てもらい,同意を得た後,潘が中央に転送して審査を受けることが決定された。会はほぼ毎週一回開かれ,大半が日本語を解すので,ナップの綱領を主に参考とし,ロシア語を解する蔣光慈がラップの綱領と組織状況を話した。しかし,魯迅は12月末か1月初旬の寒い日に「一度だけ出席」したのみで,⁽⁴³⁾ 鄭伯奇は「創造社の元老の一人」であり,政治的,思想的に問題がないものの「一度も参加しなかった」といい,蔣光慈は創作に多忙で「常に参加とはいかなかった」という。

蔣光慈は少なくとも11月9日までは日本に滞在しており,夏衍の言うように第一回準備会議が10月に開催されたとするなら参加のしようがないなど,細部には記憶違いや疑問点もあるが,⁽⁴⁴⁾ここでは蔣光慈が果たした役割及び党員で出席率が芳しくなかったのは彼だけであったことを確認しておく。「内戦」とはもちろん,革命文学論争のことであるが,蔣光慈は論争の最初期に「革命文学は幾編かの捉えどころのない論文が建設できるものではない」⁽⁴⁵⁾と言明し一貫して創作と翻訳に励んでいた。左連結成準備が進められていた頃,彼は「生活を安定させ,静かに工作に専念し,偶然の事故を避けるため」,その住居をごく少数の親しい友人にだけ知らせ,長編小説の創作と『拓荒者』の編集に活動を集中しており,訪問者も少なく,銭杏邨が編集の手伝いに来訪するぐらいであった。⁽⁴⁶⁾確かに彼は活動の重点の置き方からして,外部との接触が少なかったのは事実であろう。とはいえ,ソ連より帰国以来,早くから革命文学を提唱し,巧拙はともかくその実作家である蔣光慈は『麗莎的哀怨』批判にもかかわらず,左連結成に際してはなくてはならぬ存在であった。⁽⁴⁷⁾

左連は1930年3月2日,成立大会を開き正式に成立した。『拓荒者』第3号は「国内外文壇消息」欄でその成立を告げるとともに,大会で通過した「理論綱領」を掲載している。⁽⁴⁹⁾ それは以下の部分を含むものであった。

「我々は歴史の進行と社会発展の真の姿を抽象的に理解するものではない。我々は帝国主義的資本主義制度がすでに人類の進化の桎梏と化し,しかもその『墓掘り人』たる無産階級がその歴史的使命を担い,この『必然の王国』において人類最後の同胞戦争——階級闘争を行い,人類の徹底的解放を目指していることを知っている。」

「我々の芸術は『勝利か,然らずんば死か』の血なまぐさい闘争に献げられざるを得ない。

芸術がもし人類の悲喜哀楽を内容とするものならば,我々の芸術は無産階級がこの暗黒の階級社会の『中世紀』で感ずる感情を内容とせざるを得ない。」

同誌同号には馮憲章の「『麗莎的哀怨』与『衝出雲圍の月亮』」が掲載された。馮憲章は太陽社東京支部の定期会合で,蔣光慈が欠点の指摘を求めたのに対し,「長所ばかりを多く語り,欠点については殆んど何も語らなかった」⁽⁵⁰⁾一人であり,『麗莎的哀怨』を評価する少数例であった。

馮憲章は,ロシア貴族没落の必然性を描くことにより,新しい階級の興隆を暗示しており,「社会の進化の過程を闡明」し,「反面的表現方法」を採用して,「すでに標語口号スローガンの形式を脱皮し,しかも一步深く進んで新内容に適合する新形式の道の端緒についた」作品であるという。同誌翌月号で華漢が批判するように「ロシア貴婦人の横暴卑劣さ,高慢な幸福」よりも「ロシア貴族の没落と沈倫,漂泊と悲運への同情」を感ずるとする見解⁽⁵¹⁾が多数を占めたことは,李立三路線下で活動する党員は勿論,左連の綱領からしても,左翼陣営からの批判は当時としては当然であった。少なく

とも「無産階級がこの暗黒の『中世紀』に感ずる感情を内容」としていないことは一目瞭然である。「反面的表現方法」は成り立たないのか、それとも、そもそも「反面的表現方法」は理解の外にあったのか、いずれにしてもそうとられてはいない。馮憲章が「『麗莎的哀怨』というこの形式が、我々新興文学の唯一の形式とはいえないものの、少なくとも我々はこれは『哀怨』の題材に適合する形式であり、我々の多種多様な形式中の有力な一形式であるということではできよう。」という時、弁解に近い響きがするのは否定できない。

左連の理論綱領は「我々の現実社会に対する態度は、世界の無産階級の解放運動を支持し、国際的な反無産階級の反動勢力と闘争せざるを得ない」で締めくくっている。また4月29日に開かれた左連第一次全体会議でなされた「政治報告」⁽⁵²⁾の情勢判断と「左翼作家」の決意とは以下の通りであった。

「中国の革命的労働者農民の勢力は、日増しに勢いを増し、支配階級全体は周章狼狽の有様である。彼らは事実上農村を放棄し、都市を守らざるを得なくなった。近時、農村における土地革命の急速な進展と、都市労働者の闘争に対する強烈な弾圧は、革命の高まりがまもなくおとずれんとするのを物語っている。」

「この革命の高まりの到来せんとする前夜にあって、革命的文学者は、ためらうことなくこの苦しい行動に身を投ずるべきであり、例え文学者としてたつべき地位を失うことがあっても、何ら惜しむに足りない。」

以上のような認識と決意からもたらされる結果がどのようなものであったかは、「左連五烈士」の例を持ち出すまでもなく、蔣光慈の関係した団体について一例を挙げておくにとどめる。田漢らの南国社は「組織の整頓を開始し、共産党はまた錢杏邨（阿英）、蔣光慈らを派遣して、この団体に参加させ、直接、南国社の左転を推し進めた。」

といい、「幾人かの社員は、反帝大同盟の領導の下、各種の大衆革命工作に参加し、多くの者が租界の反動当局に逮捕され、監獄につながれた」。そして「立三路線の領導下で、上海の全ての革命工作（文化工作をも含む）はみな上海反帝大同盟の統一指揮下で都市暴動の準備をした。いつもデモンストレーションを行った。戯劇工作も影響を受け、演出活動は大幅に減少した。」⁽⁵³⁾

無論全ての誤りの原因を「路線」のみに帰すことはできないであろう。党サイドで左連の結成にかかわってきた若い「文化工作」者たちも、それを生みだす一人であり、甘受してきたのであり、その一翼を担っていたことは紛れもない事実であった。

蔣光慈が滯日中に会った蔵原維人によれば、「しきりに党活動、大衆活動と文学者の創造活動との矛盾について話しかけ、自分は作家で作品を通じて大衆に影響を与えることが出来るのだから、実際活動はやらなくてもよいのだというふうにとれるような発言をしていました。」という。⁽⁵⁴⁾

「実際活動」の具体的内容が問題であるが、それを不問にすれば十分考えられる発言である。彼は1925年3月、こう語っていた。

「私は大衆運動に対して十分に同情の意を表します。しかし私個人の生活はやはり孤独面に片寄っています。私は政治家にも出しゃばりの流行屋にもなろうとは思いません。それで私の交際は少ないのです。私は偉大は文学者になろうと思いますが、これは恐らく妄想でしょう。」⁽⁵⁵⁾

楊邨人によれば、『麗莎的哀怨』が「党内の同志のあらゆる方面からの非難を受け」、「同志間の不理解を感じ、日本へ東游した」後、次のような事態に至ったという。

「この年（1930年）の夏、入獄し病を得、出獄後神経に傷を受け、腸熱と肺結核の旧疾患が再発した。当時、共産党は『李立三路線』の統治の下、上海暴動の計画準備を行い、しじゅう党

員に街頭デモをやるように命令していたが、光慈は病気を理由に辞すも同志は諒解せず、毅然として脱党書を提出するや、党は彼の罪状を公開し、精神上受けた打撃は彼に致命傷を与えた。⁽⁵⁶⁾

その党除名に相当する「罪状」とは、当時の上海の党地下機関紙『紅旗日報』の紹介⁽⁵⁷⁾によれば、小説『麗莎的哀怨』が白色ロシアを擁護し、ソビエトを非難中傷するものとして、発売禁止を命じたにもかかわらず従わなかったこと、健康を理由に青島へ療養に行くと言明し、党の許可なく日本へ逃亡したこと、入党以来一貫して小ブル的であり、大衆に接さず、組織活動を行わなかったこと、などであった。

左連成立大会で彼とともに常務候補委員に選出された周全平は、「白色テロルの脅威と周囲の劣悪な家庭的社会的環境の誘惑下で、意識的に積極的な反動行為をなした」として、1931年4月20日付で「開除」、葉靈鳳は「反動勢力に屈服し、国民党に『悔過書』を書き」「実質的に走狗になった」として4月28日付で「開除」、周毓英は「日刊紙に反連盟の言論を公開發表し」「明らかに無産階級革命文学の叛徒となった」として、5月2日付で「除名」を通告され、左連機関紙『前哨』にて宣告された。⁽⁵⁸⁾ 翌年11月には、太陽社創立以来の社員・楊邨人が『読書雑誌』に「離開政党的生活の戦壕」を發表し、更にその翌年4月、出獄した姚蓬子は『中央日報』に「脱離共産党宣言」を發して転向した。⁽⁵⁹⁾

当時の上海に中央を置く共産党による蔣光慈批判は、上述の人々とは異なり、基本的には創作活動と作品に根源を發していた。党の工作活動に対する消極的な態度は、確かに存在したであろうが、よくみられるように後から増幅されてつけ加えられた感が強い。彼は左連より、工作活動を公開で批判された形跡は見当らない。左連はやがて党団が大きな力を持つようになる。成員に対する拘束力が党と同レベルではないことも事実であろうが、

蔣光慈はあくまでも左翼陣営の一員としてとどまり、その生命が燃え尽るまで変節することはなかった。

彼は出獄後、古傷を再發させ、除名処分に至り、肉体的苦痛に精神的打撃も加わり、その著書はことごとく發禁に遭い、⁽⁶⁰⁾ 経済的窮迫と重なり、文字通り満身創痍の中で、1931年8月31日未明、30年の生涯を閉じた。遺体は即日入棺され、変名（蔣資川）で上海公墓に葬られた。⁽⁶¹⁾ 送葬者は錢杏邨、楊邨人、樓建南、呉似鴻の四人のみであった。⁽⁶²⁾ 抗日戦中、同公墓は日本軍の飛行場となり、解放後の1953年5月23日、上海学芸会連合会の主宰により虹橋公墓に安葬された。墓碑は陳毅の揮毫になるという。⁽⁶³⁾

Ⅲ. 『麗莎的哀怨』と『咆哮了的土地』をつなぐもの

確かに蔣光慈は病死した。しかし、転向後の楊邨人がいうように、また郁達夫が、療養中に蔣光慈のそばについていた青年の話として「光慈の死は、精神上受けた打撃の方が、身体上の打撃より一層の致命傷となった」⁽⁶⁴⁾ と記しているように『麗莎的哀怨』批判と党除名による精神的苦痛が死の大きな要因となった、というのが一般的な見方であろう。死から二日後に書かれた「最良の友」錢杏邨の追悼文⁽⁶⁴⁾では以下のように述べられている。

「彼は中国文芸運動を開拓し、しかもまたこの運動を不断に展開しようと努めたけれども、しかし、彼はこの発展の浪潮の中で死んだ。なぜなら1928年以後、彼自身はかえって徐々に停滞したからである。彼の強固な個性は、彼をして一切を更に深く理解せしむること能はず、ために、彼の文芸運動に対する認識は、その他の文芸運動者と、自己批判の闘争の中で、不断に衝突し、対立した。最後に至り、1930年秋、不慣れな規律生活のため、甚しくは自己の政治生

命を断つに至った。彼は自分が全生命をもって革命に献じ、自分の創作は凡そ全てが発禁に遭い、而るに同志はかように不理解であるのかと考へた。彼は深刻な悲哀を感じた。彼の生活状態は、完全に孤独の境地に陥り、彼の内心の無限の苦悶を形成した。」

「徐々に停滞した」という「1928年以後」とは革命文学論争から左連初期、党史上では瞿秋白、李立三、（王明の初期）と続く極左路線の支配する時代であった。それらは国民革命の挫折による階級対立の激化を革命情勢の高まりとして把える点では共通しており、国共分裂により、いわば追いつめられた共産党が党独自の政策の実行を迫られ、組織としてより目的意識の鮮明な集団と化さねばならないのは、ある意味では当然の帰結であった。階級意識のより強固な集団としての組織化が計られたのは文芸界も同様であった。蔣光慈は太陽社（後に左連）の一員であると同時に中国共産党員であった。

「もし、私が暴風雨の時代に生まれなければ、あるいは幾編かの美麗曼妙な花香鳥語の抒情詩を書けたかも知れぬ。だが、私はこの暴風雨の時代に生まれた。——私には私の時代が私に与えた使命を免れるすべはなく、それに事実、私は免れようという考えを起したこともない。」⁽⁶⁶⁾ 勿論、「時代が私に与えた使命」とは、左連第一回大会「政治報告」の「例え文学者としてたつべき地位を失うことがあっても何ら惜しむに足りない」というように、実際の革命活動と芸術の創造活動を同一視するものではなかった。理論と実践の不統一といってしまうとそれだけであるが、政治の理論と実践が芸術のそれと同一でないことは言うまでもなからう。蔣光慈は「友らよ、どうか二度と私を詩人と呼ばないでくれ、私は君たちが、光明のために奮闘するのを助ける鼓手なのだ。君たちが目的を達し凱旋する時、私の責務も果せるのだ……」⁽⁶⁷⁾ というように、実際の革命活動

とは一定の距離を保っていた。

『麗莎的哀怨』は革命文学の実作家の「大胆な」「試み」であった。当時であってはいくまでもなく、現在の中国にあっても否定されるべき作品であり続ける。麗莎が死の直前に悟ったのは、ロシアが滅んだのではなく、多数の犠牲の上に享受していた特権と貴重な財産の、つまり古いロシアが亡んだだけだということであった。ヒロインへの「同情」を即ソビエトへの非難へと結びつける論は、いわば政治の言葉というべきものであろう。姉は学校で教育を受けたため、革命党へ走ったのであり、ヒロインはその失敗に懲りた両親の下で「大事に」育てられた世間知らずの娘であった。彼女の罪は行為にではなく、存在——貴族の娘であることにあった。革命は、一つの階級が他の階級を打倒する激烈な闘いであるには違いないが、その過程で、ともすれば忘れされがちな個人、つまり人間の問題を追求するのを文学者蔣光慈は怠っていない。それは小説としては遺作になる『咆哮了的土地』でも同様である。

『咆哮了的土地』は『麗莎的哀怨』とは違った意味で新しい試みであった。それまで蔣光慈が書いてきた小説は全て主要には都市が舞台であった。それは同時代の党員が一部を除き殆んど中国革命についても、ロシアのマルクス主義によるロシアの革命をモデルとしていたことによろう。インテリ出身の党員は特にその傾向が著しかった。彼らにとって、革命は都市が領導するというのは半ば自明のことであり、蔣光慈自身こう述べていた。

「十月革命の指導者は、都市であり農村ではない。無産階級であり農民ではないのだ。十月革命の前進の方向は、都市の指導に順って進んでいるのであり、都市の文化は一切の古いロシアを破壊し、貧困で、せせこましい、惨憺たる農村の面貌を改変したのだ。農村のロシアの暴動は都市の革命を助成した。が、都市の革命が結局は根本的にロシアの基礎を揺り動かした

のだ。」⁽⁶⁹⁾

また、革命の同伴者作家に言及した際に、こうも述べていた。

「彼らは無産階級革命の意義が少ししか分っていない。そのため彼らの希望と注意力は、都市の無産階級に注がれず、農民の身の上に注がれる。こうして、我々はこの様な作家は無産階級革命の芸術家ではなく、その同伴者であるだけにすぎないと言うのである。」⁽⁷⁰⁾

『咆哮了的土地』のストーリーは、国民革命軍に従軍していた地主の息子李傑と元鉦山労働者で帰郷していた貧農張進徳を中心に、農民自らが環境を変るべく起ち上り、農会を結成し、地主らの反撃、農会内部の内紛やむちゃくちゃ、いきすぎを克服しつつ発展し、恐怖した地主らの要請により県城より出動した軍隊の包囲を破り、最後に金剛山（＝井岡山）^{チンカン}の農村根拠地に自らの「光明」を見出すというものである。

ここで蔣光慈は、中国全体からすれば少数と言わざるを得ない、献身的なインテリや都市労働者の果敢な闘争以上に、祖国に数千年来息づく最も虐げられた多数の農民と、彼の意識の中では「急激な変化を欲しない」はずの農村の変革にこそ自国の革命の将来もかかっていると気づいたようである。

この五十六章からなる長編小説が書き上げられたのは、「罪状」確定後の1930年11月5日であった。1927年前後の農民運動を描いた作品として、また左連初期の成果として解放以来評価は高い。一方『麗莎的哀怨』は1930年の批判がそのまま現在まで生きている。解放間もない50年代に書かれた文学史では、「読者に与える印象はヒロインの『哀怨』に必要以上の同情を与え、その作品効果は失敗であるとしないうけにはいけない」⁽⁷¹⁾、「小ブルジョア階級の立場に立って問題を分析、観察」⁽⁷²⁾しており、「かえって、あってはならぬ同情の心理を産み出している」⁽⁷³⁾とする。また最近出版

された文学史でも、「動機と効果が相反する作品である」⁽⁷⁴⁾、「同情の筆致で十月革命後に国を追われた白色ロシアの貴婦人のために悲哀の挽歌を歌っている」⁽⁷⁵⁾という具合である。

『麗莎的哀怨』から『咆哮了的土地』の創作に向わせたものは「1930年以後、革命情勢の発展と左翼文芸運動の鼓舞及び更に一步進んだマルクス主義文芸理論の学習が蔣光慈に消極的な思想感情を克服させた」⁽⁷⁶⁾とする見方も中国にはある。それは後から見た一面の「事実」ではあるかも知れない。しかし、事実経過は必ずしもそうではなかったことは、みてきた通りである。作家蔣光慈にとって『麗莎的哀怨』も『咆哮了的土地』も同様に一つの作品である。革命文学論争における実質的な沈黙——作品批判——党除名（楊邨人によれば「毅然として脱党書を提出」）の文脈の中で一貫していたのは、飽くことなき作品創造への執着である。

魯迅は左連成立大会における有名な講演⁽⁷⁷⁾で、「もし実際の社会闘争と接触せず、ただガラス窓の中に閉じこもって文章を書いたり、問題を研究したりするだけならば、それがどんなに激烈で、『左』であっても、簡単にやってのけられます。ところがいざ実際にぶつかると、たちまちに打ち砕かれてしまいます。部屋に閉じこもっていれば、徹底した主義を放談することは最も簡単であります。しかしまた最も簡単に『右傾』もするのです。」と述べた。これは何も蔣光慈のみに向けられた批判警告ではないが、李何林のように彼についていうと最も適した評語であるとする見方もある。⁽⁷⁸⁾ 作家が作品の創造に精を出す。そしてその作品は一部には熱狂的な支持者も獲得した。作家は書き続ける。それ自体極めて当然の営為であり、矛盾はないはずであった。しかしそれは必然的に作家が「ガラス窓に閉じこもる」時間を多くする。しかも蔣光慈の場合、肉体的条件がそれに拍車を掛けた。皮肉なことに、そのような

状況下で左連初期の成果として相応の評価をせざるを得ない作品は生まれた。「政治生命を断」たれ、経済的、肉体的苦境の中で彼に書き続けさせたものは何であったのか。その手懸りとして、想起されるのは「ソ連の『レフ』派の文芸思想の影響を受けていた」⁽⁷⁹⁾ ということである。留学中（1921～24年）のソ連は、レフ（芸術左翼戦線）がその運動の最盛期にあった。「レフは芸術と文学の自律にアクセントを置く運動であって、レーニンをはじめ西欧で亡命生活を送った党幹部の支持を受けた」といい、「レーニンが24年にマヤコフスキーが30年に死んでいる。この期間がレフの衰退期であり、トロツキーの転落と期を同じくしている。」という。⁽⁸⁰⁾ 晩年の蔣光慈の軌跡から想起されるのは、そのトロツキーが、ピリニャーク⁽⁸¹⁾ら「セラピオン兄弟」について語った次の言葉である。

「ある者は文学から革命に近づいたのではなく、革命から文学に入ってきた。革命に始まる短い系譜があるということ、まさにそれによって彼らは、いや少なくとも彼らの何人かは、革命から退き、革命の社会的引力を離れて、創作の自由を確保する内的要求といったものを持っている。彼らは初めて芸術が自らの権利を持っていると感じたようだ。」⁽⁸²⁾

* * *

蔣光慈の作品は芸術として高く位置づけられるものではないだろう。それはむしろ先駆的な価値を有するものである。「あらゆる新生事物と同様、蔣光慈の小説は拓荒者特有の稚拙さと欠点を帯びている」「だが、彼が二、三十年代の中国文学にもたらした新しい人物、新しい風采、中国無産階級文学の創建と探求に対してなした貢献は、抹殺することはできない」⁽⁸³⁾ であろう。

先駆者はやがて乗り越えられる。その死は多くの場合、悲惨である。悲惨であればあるほど劇的効果を増す。だが、この先駆者は敵の手により非

業の死を遂げた「烈士」ではない。大わくにおいて思想と行動をともにしてきた当時の集団から、批判され除名され、「精神の地獄」⁽⁸⁴⁾ 下に生き、そして死んでいった。それは多分に彼自身の「不慣れな規律生活」と何よりも「強固な個性」に負うところが大きであっただろう。とはいえ、作家が最後に苦しんだ問題、決して不変ではありえない一元的な価値観を持った集団に属しながら芸術の創造者であり続けること、そして打倒さるべき階級出身の李傑が「革命」派であり続けるためには肉親に対して非情にならざるを得なかったこと、などは遅れて来た人間もまた審問官の前に立たされ試煉を経ることになるであろう。

「どのような社会でも、芸術家はひとつの使命を荷っているが、その力は限られたものでしかない。作家、映画監督、画家あるいは音楽家、こうした人々と力ではおそらく世界を変えることはできないだろう。しかし周縁にいて、絶えず激しい異義申し立てを行うことはできる筈だ。芸術家は永遠の反逆者なのだ。芸術家がいる限り、権力はすべての人間が、自分と同じ考えを抱いているとは言えない」。⁽⁸⁵⁾ 作家が夢想した革命後の社会は「全ての人々が素晴らしい音楽に耳を傾け、貴重な作品を創造する機会を持てる」⁽⁸⁶⁾ そのような社会であった。「芸術家が自らの権利を持っていると感じ」、「芸術と文学の自律にアクセントを置き」、「創作の自由を確保」しようとする時、何が起こるかは、以後の文学史が明らかにしてくれるであろう。

「五四」の中で芽ばえた個人主義への希求は十分に開花することなく、革命文学論争——左連とつづく「左翼十年」の間に、集団主義にとってかわられた。しかも、そこに活躍した人々の多くは、デモクラシーとサイエンス、そして何よりも個人主義という「新しい因襲」⁽⁸⁷⁾の重荷を背負い、時には内部的に相剋しながらも、中国革命の前途を信じつつ生き、死んでいった。

《注》

- 1) 以前、河南の志成小で占谷堂という進歩的な教師にめぐりあっている。占は「積極的に男女平等を宣伝し、女学生の募集を主張し、迷信を打破するなどの思想を宣伝し」、「学校周辺の郷村調査に行き、農民に耕す者に田を、列強を打倒するなどの道理を説く」というような人物であった。蔣は占の組織した読書会では「高小班の活躍分子」であった、という。(呉騰凰「蔣光慈与他的小学老師」、『新文学史料』1980年2集)卒業後、二年程、家庭で父の助けで古典詩文の勉強をし、後に霍邱中学(一説に固始中学)に入学するが、校長が子弟を貧富によって差別し、「光慈はこれに大いに不満で、貧しい子弟を糾合して争い、ために学籍を解除された」という。(呉騰凰「蔣光慈在安徽」、『新文学史料』1979年第4集)尚、蔣光慈は俠僧、光赤を名のり、「四・一二」後に光慈と改めた。
- 2) 『新夢』はネクラソフ、ブロークラの訳詩を含む全四十一首を収め、1925年1月、上海書店出版。高語罕は序で、訪中していたタゴールと並論し、「彼は決してタゴールのように、数億のインドの同胞が、イギリス人の蹂躪を受けるのを見ながら、なおあの『忍耐』、『精神の自由』、『ヨーロッパ人はすでに我々の面前で救いを求めている』などといった鬼話を持ち出し、『左の側に立って右を援助し』、イギリス人に代って懸命にインド人の革命の激流を消し去ろうとしない。今また恥知らずにも中国にお出ましになった、この老いぼれの死にぞこないめ、私は『新夢』の出版が、あの老いぼれが撒き散らした悪い種を断ち尽してくれることを願う。」と推薦意図を語っている。
- また、26年12月の第三版出版に際し、六首が削られたという。(唐弢『晦庵書話』)
- 3) 周新民「五四時期的安徽学生運動」及び李雲鶴、瞿宗文、李仲憲「五四与安徽学生運動」、

ともに中国社会科学院近代史研究所編『五四運動回憶録』(下)所収。1979年。前者は中華書局1959年出版の『五四回憶録』原載で、高語罕の名はみえず、後者は1957年創刊の『安徽史学通訊』原載で、穆考夫氏の整理による。

- 4) 呉騰凰「蔣光慈在安徽」。
- 5) 周新民「五四時期的安徽学生運動」。
- 6) 呉騰凰「蔣光慈在安徽」。
- 7) 『五四時期期刊介紹』第2集上, 1959年。
- 8) 二人の信書は宋若瑜の死後、『紀念碑』と題して亜東図書館より出版。上巻は宋の57封, 下巻は蔣の40封を収む。
- 9) 「回憶青年学会」、『五四時期的社团』(三)所収。1979年。
- 10) 蕪湖五中では、劉校長を迎えるにあたって、反動派の校長潘光祖追放運動をストライキで闘い「目的を達成した」という(周新民)。また蔣が来日中に材料を提供したという『プロレタリア文芸辞典』では、五中は「当時最も先駆的な人物によって経営されていた」という。蔣は劉校長在任中の進歩的な雰囲気の中で五中時代を過したと思われる。
- 11) 呉騰凰「蔣光慈在安徽」。
- 12) 山田清三郎他編『プロレタリア文芸辞典』。
- 13) 1923年『学滙』第79期の「同志消息」に『蕪湖安社』は近くまた新たに改組を重ね、『前進』月刊を刊行するとともに、吾党の主義の真理を宣伝し、各地の同志の活動のニュースを紹介する。同志諸君は蕪湖第五中学の李冰心君に通信を寄せられたし。」の記載がある。(『五四時期的社团』(四))
- 14) 『五四時期期刊介紹』第2集上。
- 15) 『五四時期期刊介紹』第2集上より再引用。
- 16) 呉騰凰「蔣光慈在安徽」は、1962年蕪湖市中に蔣の同窓生呉葆萼、王持華及び五四時の老人を訪ね、聞き取りを整理したもの。呉葆萼は五中、上海外国語学校、モスクワ東方大学を通じ「同

班同学」であったといい、王持華は蔣光慈が市学連の副会長をしていた当時の秘書長であったという。安徽省の一地方都市・蕪湖からモスクワへどのような経緯により「留学」できたのか、以前から関心を持っていたが、詳細は不明であった。『新夢』所収の詩及び（注18）と照し合せて、その信用度は高いと思われる。但し、ウラジオストックへは日本経由で行ったとしているが、根拠はいま一つ不明。多分「紅笑」などから判断していると思われるが、ここでは採らなかった。

17) 『蔣光慈詩文選集』（人民文学出版社 1955年）より訳出。

18) 曹靖華、韋素園については、韋順、王曾睿「魯迅培養的青年文学戦士——韋素園」、『中国現代文芸資料双刊』第5集所収。1980年。

劉少奇については、呉騰鳳「蔣光慈在安徽」。

19) 『プロレタリア文芸辞典』によれば、「アナーキスト抱朴が「蔣光慈と共に入露したと自称」していたらしい。蔣は帰国した24年の8月と9月に『民国日報』副刊『覚悟』に「一封公開的信——駁抱朴」，「抱朴与反革命」を寄せているが、その内容は不明。高語罕が言明しているように、蔣自身がアナーキストであったとすれば、共産主義とアナーキズムに関して、何らかのやりとりがあったものと推察される。

20) 韋順、王曾睿「魯迅培養的青年文学戦士——韋素園」。

21) 呉騰鳳「蔣光慈在安徽」によれば1922年7月。

22) モスクワ留学中に知りあい、「赤都心史」(24年、商務印書館より出版)の原稿は、蔣光慈が帰国に際して携え、文学研究会に渡したという。また、「秋白は留ソ中に『俄国文学史』を書いていたが、出版されないままであった。1927年、光赤が『十月革命与俄羅斯文学』を書き上げた時、秋白は原稿を彼に渡し、書後に附して下編とし、書名を『俄羅斯文学』と改め、創造社より出版

した。」「後に創造社が閉鎖され、この本の紙型は泰東書局に移され、署名も『蔣光慈』から『華維素』に変えられた。」という。（「關於瞿秋白的文学遺著」1938年、『阿英文集』所収）

尚、『瞿秋白文集』（人民文学出版、1953年）所収の「十月革命前的俄羅斯文学」は蔣光慈の「刪改」が入っているという。

23) 郭沫若「創造十年続編」1937年。

24) 「寄友」，1927年7月7日，漢口にての作。後に『哀中国』に収む。その一節は、「友よ、私は悟ったのだ、どんな党権、左傾も……すべて空語であり／今日は革命党人であっても、明日は凶悪な素顔を露呈し得るのだ／旧軍閥は土匪を利用し、新軍閥は民衆の勢力を利用することを学び取った／ヤツらの本性は、ああ、ヤツらの本性はもともといっしょなのだ！」

25) その経過は錢杏邨「流離」（1927年日記選），「哀悼李克農同志」（『人民日報』1962年2月14日），ともに『阿英文集』所収，及び楊邨人「太陽社与蔣光慈」，（『現代』3巻4期，1933年）に詳しい。

26) 「流離」8月24日では、「昨日今日の両日、^{アパートローラー}挨戸検査があり、『社会科学書』が禁を犯すことになるばかりか、思想の多少激しい文学書さえ犯罪になる、と盛んに伝わる。」といい、4人は結局、武漢の状況に失望し、上海で落ちあうことになる。

27) 「不滅的印象」，『作家』1936年11月。

28) 小野忍「革命文学」，『中国文学史の問題点』所収，後に『中国文学雑考』（更に「革命文学から抗戦文学へ」として『中国の現代文学』所収）1966年。

藤本幸三「茅盾と革命文学派との関係について」，郁立大学『人文学報』No.78，1970年。

丸山昇『魯迅と革命文学』，1972年。

佐治俊彦「革命文学論争と太陽社」，『東洋文化』52号，1972年。

- 29), 56) 「太陽社与蔣光慈」, 『現代』3巻4期 1933年。
- 30), 32) 「回憶杜国庠同志的文学活動」, 『人民日報』1961年1月27日, 『阿英文集』所収。
- 31), 79) 嚴家炎「評1928年無産階級文学的倡導和論争——魯迅和創造社, 太陽社論争和幾個問題」, 『文学評論』1978年2期。
- 33) (3)参照, 続く一節は,
「友よ私は悟ったのだ, 私たちは銃をとり自らの手に握らねば／どうか信じてくれ, ただ砲弾だけが私たちの勝利を保障してくれるのだ／私たちは軍隊へ, 軍隊へ入らねば／銃をとり, しっかり, しっかりと自らの手に握らねば……」
- 34) 『野祭』(27年11月, 現代書局), 『菊芬』(『創造月刊』1巻9期, 10期に連載, 28年4月, 創造社出版部), 『最後の微笑』(『太陽月刊』に連載中は「罪人」, 28年9月, 単行本出版に際して改題, 現代書局)
佐治俊彦氏は「『短袴党』に見られる, 組織された革命の将来に対する確信は完全に姿を消し, 重苦しい断末魔のうめきが聞こえてくるだけ」とされ, 「盲動三部作」と呼ばれる。(「転換期の文化・思想闘争——蔣光慈の文学を中心に——」, 『講座中国現代史』5所収。1978年)。
- 35) 「個人の生活はもう社会の重心になってはいない。それゆえ, 文学の表現する対象は, 個人の私有する感情ではなく, 社会的, 客観的な群衆の行動である」(「謝拉皮昂兄弟——革命的同伴者」, 『創造月刊』1巻8期, 1928年1月)半年後に書いているが, 『短袴党』はその創作上の実践であったといえよう。
- 36) 以前は, 2号, 6号しか見ることができなかったが, 最近香港よりのプリント版が出回っている。同誌は7号で停刊。尚, 同誌始め, 『新流月報』, 『光慈遺集』など資料の面で故小野忍先生らの御尽力をいただいた。
- 37) 魯重「国内文壇消息」
- 38) 『太陽月刊』が7号(28年7月), 『時代文芸』が創刊号(28年10月)で発禁に遭った後, 29年3月より改称して4号(29年12月)まで発行。
- 39) 東京滞在中の日記は『異邦与故国』と題して29年12月, 上海現代書局より出版。『拓荒者』創刊号に10月22日より11月9日までの分を「東京之旅」と題して掲載。
- 40) 上海師範学院図書館資料組「中国左翼作家連盟組織機構資料滙録」, 『中国現代文芸資料双刊』第5集所収, 1980年。
- 41) 「『左連』成立前後」, 『文学評論』1980年2期。
- 42) 馮雪峰の回想では, 戴平方と沈起予が入れかわっている外, メンバーには多少の出入りがある。詳細は注40, 47参照。
- 43), 44) 夏衍はそれ以前になされた会合と混乱している。『魯迅日記』1930年2月16日に「午後柔石, 雪峰と街に出てコーヒーを飲む」の記載があり, 馮雪峰のこの箇所をもとにした回想の方が日時的に正確であろう。
「魯迅が出席し, 蔣光慈も出席した——その時彼はすでに日本より帰国しており, 十二人全員が出席, 潘漢年は出席せず, 馮乃超が主宰する形で, 座談会形式をとり, 各人が思うままにそれぞれの感想を語った。」という。(馮夏熊整理「馮雪峰談左連」, 『新文学史料』1980年第1期)。
- 45) 「關於革命文学」, 『太陽月刊』2期, 1928年。
- 46) 吳似鴻「蔣光慈回憶録」, 『中国現代文芸資料双刊』第3集, 1963年。
- 47) 夏衍のいう準備小組の十二名は, 事実上, 左連の発起人でもあり, 『基本構成員』と呼ばれ, 「馮雪峰談左連」によれば, 「潘漢年が馮乃超, 阿英, 夏衍と画室(馮雪峰)らと協議して」提起したという。また, 蔣は当時, 「革命文学」

の実作家として人気を博し、郁達夫「光慈的晩年」によれば、1929年に書いた中編小説『衝出雲圍的月亮』は出版した年に6版を重ねたという。

48) 『拓荒者』には「已于三月二日正式的成立了。」

(岡点筆者)とあり、阿英は左連成立後、「常務委員会の決定にもとづき」、『新流月報』を5号より『拓荒者』と改称した、という。『拓荒者』創刊号は1930年1月の発行。阿英の記憶違いでなければ、左連は1929年末には既成の事実で、常務委員の選挙結果も予め策定されていたものと思われる。ともあれ、左連の成立は魯迅をいかに「説得」するかにかかっていたといえる。尚、当日蔣光慈は「病気のため出席できなかった」とする説もある。(丁景唐「關於参加中国左翼作家連盟成立大会的盟員名單(校訂稿)」、『中国現代文芸資料双刊』第5集)

49) 『崩芽月刊』1巻4期、『大衆文芸』2巻4期等にも掲載されており、多少異同がある。

50) 『異邦与故国』9月15日。

51) 「読了馮憲章的批評之後」。

52) 「巴爾底山^{バルチザン}」第4号、1930年5月

53) 趙銘彝「回憶南国社和田漢同志」、『文芸研究』1979年創刊号。尚、馮憲章も31年に獄死。

54) 釜屋修「異邦の秋」〔訳註〕【付記】『野草』1970年創刊号。

55) 『紀念碑』1925年3月18日。

57) TSI-AN XIA (夏濟安)「The Phenomnon of Chiang Kuang-t'zu」,『The Gate of Darkness』1968年。

58) 『文学導報』1巻2期(1931年8月5日)「開除周全平,葉靈鳳,周毓英的通告」,馬良春,張大明編『三十年代左翼文芸資料選編』所収。1980年

59) 「左翼十年大事記」,前出『三十年代左翼文芸資料選編』所収。

60) 死から三年後の1934年当時の主な発禁書は、魯迅「『且介亭雜文二集』後記」によれば次の

通り。

〈亜東〉 『義塚』『少年漂泊者』『鴨綠江上』『紀念碑』

〈泰東〉 『俄国文学概論』

〈北新〉 『一週間』『衝出雲圍的月亮』

〈光華〉 『現代中国作家選集』

〈現代〉 『光慈遺集』『麗莎的哀怨』『野祭』

他の作家では、魯迅が『魯迅自選集』など12冊、郭沫若が『中国古代社会研究』など11冊、茅盾が『子夜』など9冊、錢杏邨が『現代中国文学作家』など8冊、それ以外にも馮雪峰9, 了玲7, 巴金5冊など。魯迅、郭沫若と並んで当時の発禁作家ベスト・スリーという次第である。

61) 吳似鴻「蔣光慈回憶録」。

62) 楊邨人「太陽社与蔣光慈」。

63) 「革命作家蔣光慈遗体遷葬虹橋」,『人民日報』1953年6月30日。

64) 「光慈的晩年」,『現代』3巻1期 1933年。

65), 84) 「在發展的浪潮中生長在發展的浪潮中死亡(1901 — 1931)」,上海『文芸新聞』1931年9月15日,『阿英文集』所収。

66) 「『哭訴』後記」1928年3月。尚、これは復旦大学中文系現代文学組学生集体編著『中国現代文学史』より再引用。

67) 「『少年漂泊者』自序,1925年11月。

68) 十三章まで『拓荒者』に掲載。吳似鴻によれば、蔣の死後、1932年に『田野的風』と改題して湖風書店より初版2000部出版されただけで発禁、翌年夏に現代書局が勝手に出版広告を出したことから話がこじれ、そのまま出版されずじまいになっていた、という。

69) 「十月革命与俄羅斯文学——五,葉賢林」『創造月刊』一卷8期。

70) 「十月革命与俄羅斯文学——六,謝拉皮昂兄弟——革命的同伴者」。

71) 王瑤『中国新文学史稿』(上) 1951年

72) 復旦大学中文系現代文学組学生集体編著『中

国現代文学史』1959年。

73) 劉綬松『中国新文学史初稿』1956年。

74) 《中国現代文学史》編写組『中国現代文学史』1979年。

75), 76) 田仲濟, 孫昌熙主編『中国現代文学史』1979年。

77) 「對於左翼作家連盟的意見」, 『二心集』。

78) 「左連成立前後十年的新文学」, 『中国新文学史研究』1951年。

80) 内村剛介「トロツキー『文学と革命』(I)〔訳註〕」。

81) 1926年訪中時, 蔣が通訳をつとめ, 田漢ら南国影劇社(後の南国社)員と会っている。当時, ピリニャークの翻案劇『到民間去』をやっていたという。(注40及び53)

82) トロツキー『文学と革命』(I)。

83) 方玲「革命文学的拓荒者——蔣光慈」『書林』1981年3期。

85) カルロス・フェンテス「自由としての映画ルイス・ブニュエル」, 『海』1980年10月号, (木村栄一訳)。

86) 「無産階級革命与文化」, 『新青年』季刊3期, 1924年8月。

87) 彼らは個人主義に強く惹かれる一方, 軍事的文化的「包圍攻撃」下で, 考察を深める余裕もなく, 個人主義は利己主義と同義であるかあるいはブルジョア思想として, プロレタリアートの集団主義に対立するものと考え, 革命の前進を阻む負荷として無理にも断ち切らねばならなかった。周揚は以下のように回想している。

「われわれの中の多くの者は, 没落した封建地主あるいはその他の搾取階級の家庭の出身であり, 教養と世界観から言えば, 基本的にはブルジョア知識分子である。『五四』新文化運動はわれわれに科学と民主をもたらし, 社会主義の新思潮をもたらした。当時, われわれは一切の外来の新しい知識を急いで吸収し, アナーキ

ズムと社会主義, 個人主義と集団主義(原文=集体主義)の境界をすぐには明確に区別できなかった。ニーチェ, クロポトキンとマルクスは当時, ほとんど同様にわれわれを惹きつけていた。後になってわれわれはやっとマルクス・レーニン主義が人類を解放する唯一の真理であり武器であると認識した。われわれはプロレタリアートの解放事業に身を投じたが, われわれの脳裏に存在する個人主義の思想, 感情と習慣は根本的に変更されなかった。われわれには一つの抽象的な共産主義の信仰があった。しかし, われわれの行動を支配するのは依然としていつも個人英雄主義への衝動であった。われわれは労働者, 農民と結合せず, 接近することすらも少なかった。民主革命はわれわれの切実な要求であったが, 社会主義はまだ一つの理想にすぎなかった。その当時われわれ多くの者は, プロレタリア革命派と言い, 小ブルジョア革命民主派とは言わなかった。個人主義の影響がわれわれの身上にまといつき長期間脱却できなかった。当時を回想すれば, 個人主義はかつて『個性の解放』, 『人格の独立』などの概念と関連し, われわれが封建的圧迫に反対し, 自由を勝ち取る闘争の中でわれわれを鼓舞してくれた。19世紀ヨーロッパ文学の多くの傑出した作品はいつも個人と社会との衝突, 世を憤り俗を憎むこと, 孤軍奮闘とアナーキーな反抗を描いており, それがわれわれの頭の中に深い印象を留めていた。われわれはかつて熱烈にイプセンを歓迎し, 彼の『世の中で最も孤立した人間こそ最も力のある人間である』という格言を賞賛した。われわれの中の多くの者が, 個人の奮闘を通して革命の道を歩いて来たのであり, 個人主義の因襲を背負って革命に参加したのであった。」(「文芸戦線上の一場大弁論」, 1957年9月, 作家協会党組拡大会議における講話。『文芸報』1958年5期, 訳出は同年6月出版の同各単行本より。)